



白  
語  
M.

13  
2701  
4





明伊13  
2386  
4

新齋夜語卷之四

七 室れ妓女松風が任侠幸哉迎ぬ

寛永の末のあはれハ上上統ふ。いよく春風の松をいをなり。其より京  
都よりハ何某の朝長別く仁恵坊施し。穢又辣鼓苔むすとも謂つべ  
し。されど朱雀の新屋敷小娼樓式舞ひて免許あやうくハ都鄙  
れ子弟争ひ初て陌頭の楊柳れ枝も。日毎又お尋をばくすなり。  
彼家の老長乙放刑致れ馬り男隼人ハ容貌衆小類へ年七二十を多  
く過さるり。が心をせ釋る生貨も。是ハ凡上又書を致し。高又  
一箇の筆と重く。おれハ露を致せらる。一日友小いぎなをれて朱





雀の柳巷小入松風といふ妓小逢一づりうは小膝漆の中と  
 な中比目鴛鴦を契正月とまひて通ふまゝに宝剣直千金  
 も手紙かゝ脱て相贈る事とかり。父の謹讓とも虚くする  
 小形刺へ亡八が許しおむのまゝ出あつぬる。一方ならびる  
 及びぬま。父刑致たう大に思ふも付もすぎぬるれども無  
 小思びる命をバ恥け鬮に追放しけりされむ。年人せんを  
 知喜の老ども小訴まじも。父の勤業の上ハ諸族皆取ひ陸  
 又まじら水鳥のどくづの志を頼居て。熟之む彼松風  
 こそ儲は穴を契正しするなれどもも又放さ。色をバ一策  
 もるなんと。朱雀小形として事同よ。まのふは替りし。

家大小のりやう。松風ハ病氣のよう。對面もせぬ。扱ハ家  
 かく成ぬる半を望てのちなるべしと始り。妓家の腐情と悟  
 せぬ去るも松風とハ雲を破りけて契り。おととあま  
 と志すめ。山懸し。且思ふ。これ紙居けぬれと云つて出  
 て歸せぬる。翌朝日替こと云盡し。方へ返事うて。此身  
 此上成せて。涙よりうばつりたる。いりあもし。愛をなぐさめ  
 中づきに。今も。いりあもし。年にも。赤も。映出まぬ。それ  
 いくふといふ。これ長橋磨の室の長と賭し。負て。童と  
 不日又室へ送りけり。それ紙居けぬれと云つて。瘡のお  
 ありて。おのも。對面なる。そのよ。志の。御身の上。紙居けぬ



いづく絶入侍り。家方こそかく泣果ぬるも。君ハ再び昔よお  
 たまへんと成こそ祈り侍り進もあふ又具な記するなれば  
 童がるや此公よそ免あふおとす。紙又のよ。目もこれ魂  
 流して泣涙るよるも滋。去も今一夜又り。又こ  
 こや。昔の又の口。例のゆに立寄。いづく頼面をそや  
 こて。松風ハと伺へば。ゆへなりて今釣と。播磨の室へとるな  
 るよ。いづく。おれこそささる。鳥りおで。そう流く。せん  
 かこちくく。思はる舎お立ゆりぬきと胸あさがり。君ハ終  
 小睡もす。つらび。鬼も生て具なき。命ぶらう。白刃り  
 依べ。いづく。死ハ一旦あり。安。人の心ハる

まかすまれ。おいのい。にら。んもはを。一。直播。よく  
 ぐり。室よそ。松風を。さび。せめて。生前の。別。酒を。汲。其  
 上。又。いそ。とも。か。ら。も。さ。り。ち。つ。と。と。い。定。め。昔。い。四。年。仕  
 い。僕。が。本。里。室。此。辺。さ。ら。う。い。等。ま。う。仇。一。粒。ま  
 公。ご。お。舟。よ。使。い。播。磨。よ。お。り。浮。ね。ま。る。播。磨。の。俵  
 此。麻。れ。音。も。お。身。此。秋。と。袖。濡。く。今。ま。う。い。け。な。う。ま  
 る。お。が。を。さ。ら。う。い。も。い。り。ん。の。公。斗。を。か。よ。そ。救。里。を。経  
 る。播。磨。廣。玉。よ。お。り。か。の。旧。僕。が。家。と。う。か。い。こと。た。げ  
 ぬ。い。り。ど。小。家。が。ら。る。る。田。舎。れ。地。幸。や。い。く。求。め。あ。り  
 じ。ま。り。く。ぬ。う。い。お。れ。よ。を。か。れ。む。大。は。お。ろ。こ。さ。な。う。う。流











ちりさせめいとまさんんとせし哉。あつりれ困憊大に起るこ  
 の白城唯よ重なるいりる奇怪やせるん。お殺せよと拳哉  
 下す紙松風素足よりてきりかるといやとよ卒ふらう志  
 めよき。お刻る人ありとおいそむり亭よ物けよをび里よ  
 遊女多き仲よ救るぬ童が名をかてらうひ。おとほく  
 ーあふい。いりる事ぞ。童よ何ぞとよはー流きの屬  
 なるべ姉妹も何し事あり。尋ひあつるをらぶーまよま  
 いうる。伏よそがくまそ。お毎よるひあふと伺りおく。集  
 人もつむびさよらうざれが志うくのようー。一歌の始末を  
 くれ。松風點双ー。び里の門よと妓女の員千とりてり

そよへくれぞけまようおらまらー。里人よらるまそ。あひ  
 たり。ほおよいおりまらるる。さるまも遊女のあれ上り。  
 浮雲流水の契よそ。又とおひ人は去て再ひ来らば。朝  
 れ誓ハタよかりそ。風も吹あつぬ人の心をさけさけ  
 よ。君がこころと篤実の志れ人よ契りたひー。松風の志と  
 そ浦山ー。くれ。その名のけー。さる。縁の種るん。彼松風  
 れまよまらららんま。童よすぐよ来りあらんや。いりや  
 と。最悪よいよま。集人胸うら裏さ。昔よづき。辨とあ  
 く。温袍を知らる。松風とく。怪りい。やとよ。君羅縵の  
 かやうぶら。紙がー。めよるさうれと。小集よ命がて。一







心ありし案のまれば使は連く松風入あつても。湯家大い  
驚るるぬ。松風欣と主座よつても。小鬟の香を炷うせ。  
一席よ今叙を。隼人急ばうく流浪の辛苦の憔悴枯  
朽乃身とるるといつても五くは満がる美男は園花浴し  
風流をそそりて。縋縋乃衣は脱ぎ錦繡の袖はあはれ  
む。天晴貴族の風を傳へ衣手に香いりつゝるるとま  
ん外は業をさそらんりのともていさねぬ。松風も且驚  
さ且悦む。酒酣よあつる時。鼓も二更を告るうそ。鶴児や  
かぞ寝席を鷹うんとする折。良あるは救人ぞよとある  
は。この國の大塩官の何来うそ。松風は旧好るれど自ら雪

平と字をらるり。うはの御受取うりれ珍客を付ひゆきん  
正殿を用き。銀燭を多くわやせよと罵斥うそ。湯家大い  
奔乞し隼人が方よいひひくく。小房は移し。酒は着らうや  
温執を。松風を急ぎ控まれといすま。鶴児まりて雪先生  
は光臨をれど。この國を辞し。あといふ。松風少も病せ  
ば。今夜の光達て客作りて。志うもは橋よ作りて。辭しがこ  
たれを。免さうせめるといふを。鶴児は取笑うとさひ。再三よひ  
とも。赤色を正し。とてさういふ。大は驚き。雪平よかると春  
まは。雪平怒のきを強し。その客はどの鼠客ぞ。おまへ  
海龍王を客よするとも。松風は急知音あり。安よまりとく

新刊 巻之四



こそ此もいふは。此より此れ。此れを付し。其  
 人へも不礼なりと罵られ。鶴児亡八と戦栗。松風  
 かくと告。雷先生の心を宵さあり。此方の事も通らぬ  
 べし。己おまもも害ある事と交り。とりよ。松風も領  
 掌し。衣裳を刷く。雷平が席より起れ。扱ひ彼を辞  
 し。とれよ。まきつるなりと。波庭鼓腹より。あさいなく  
 て。松風辞を正し。今宵はわい。此客は。此客は  
 席に降り中べし。今の時。彼席辭しが。此客は  
 い偏よ。大人乃省怒と希。先う。怒と起。此  
 再の臺が。園より。秋毫も悔怒。此客は。事

もあげ。又い。放ら。一。雷平。一。席  
 今叙し。ゆり。席中。再。雷平。大。怒  
 踏込。打擲。松風。任侠。今宵。誰渠。貴客  
 松風。匹夫。今宵。誰渠。貴客  
 偶。盆盤。狼藉。松風。玉。集  
 拘。熱。彼。呼。同  
 隼。閑寂。を。座











かんといふ。常平がもろくろくつた。何れも一庵の奥をれむ其  
 事云。試んと一妓よかると云や。やうなれば。隼人皆て何の事か  
 かる事うららん。初て對面もあらん。家戴安道り見識  
 る多れ。帯まれば。琴も強そやうと。松尾徳共かの正殿  
 よまわす。末座よ。想これ。上座より常平を尋とら。相  
 如君近く。事りぬ。げ。地よ。住人る。ふ。か。よ。い。ん。知。て。ん。を  
 此き。う。て。孟。と。投。ん。と。や。し。よ。彼。於。人。隼。人。と。ん。く。傍  
 よ。立。て。座。乃。末。座。よ。踏。り。小。可。が。丹。志。諸。神。い。ま。う。捨。る。友  
 り。ん。今。因。ら。ら。ら。高。子。よ。座。を。ら。半。を。と。け。ら。ら。さ。る。あ。そ。も  
 今の御身も。松揚柳れ。色。頭。志。き。ら。ら。ら。事。れ。う。て

さよといふ。隼人も。思。強。ま。且。窮。し。て。黙。然。ら。う。を。外  
 ぞ。る。も。常。平。も。案。す。お。違。る。れ。む。大。よ。作。夫。し。所。謂。也  
 何と。同。よ。是。い。家。主。人。乃。重。臣。乙。部。氏。の。男。ら。ら。青。松。乃  
 常。酒。破。く。ま。い。ら。ら。と。父。君。也。ら。ら。い。て。秘。商。し。追。放  
 ら。ら。す。主。君。の。聴。よ。達。せ。し。所。主。君。の。名。よ。お。寛。仁。の。將  
 ら。れ。ば。美。氣。の。過。を。り。て。譜。代。の。長。を。奪。ん。と。あ。ら。う。ら。ら。ん。  
 多。き。事。素。と。尋。ひ。の。お。ま。ど。き。う。う。父。刑。於。た。美。乃。美。よ。小。可  
 よ。命。が。ら。ま。う。先。雪。及。い。し。朱。萼。の。松。風。が。方。へ。音。信  
 よ。松。風。い。ま。さ。ら。ら。ら。さ。ら。れ。廢。人。よ。ら。ら。な。ら。う。と。音。れ。む。  
 及。廢。の。人。情。を。惜。も。も。詮。る。か。と。云。と。尋。ひ。の。信。れ。む。







うと年ねん齡まいと大おほきにつぶるや且かつ妻つまあれを外ほかのよ妻つまとまにお
  
 こそ。男おとこれは從したが良よしといふよいあらじに。子このこ國くに士しれは妻つまとなるも。
   
 一い段だんのよ好こう事じるれむに。聊いささもも辭こととら事ことるまさに。兵へい家けり
   
 おのりて。奴やつ女めと嫁ぐらんる。怪あやしいあらじに似にまらべるべし。
   
 今いま日ひ家けかへ賸あまりしては。荆きん婦ふが妹となりて。遊あそぶも良よし辰しん
  
 をあてて。婚く儀ぎをいれど。先まには。初はつ度どはは。片かた時ときもも早はやくは。老らう馬ば
  
 とは鞭むちをかけりといふもも。隼はやぶさ人ひとハは。孫まごのこ袖そでを執
  
 ぬ

新齋夜語卷之四終





